活動報告

藤本幸久と出会った2010年

今岡良子

3月に大阪社会フォーラムが開かれ、分科会で「One Shot One Kill」という映画の上映会が行われた。私は、迷わず参加した。

というのは、私には、息子がモンゴル人将校である友だちがいる。モンゴルの国防大学出身のエリート将校たちは、国連平和維持軍の一員として、アフガニスタン、イラク、シェラレオネに派遣されている。米軍撤退の後、傭兵で不足兵力を補うことは知られているが、貧しい国のエリート将校たちを援助と引き換えに派遣される実態はあまり知られていない。(詳細は拙著『平和の探求』参照) その息子はイラクから帰り、しばらくＰＴＳＤに苦しみ、母親も心労で病床に伏した。アグレイブ刑務所での捕虜待や市民銃撃など、米兵の行動はわずかに報道された。モンゴル兵はイラクで何をしてきたのか？何があったのか？直接、問いかけることは難しかった。私は、その答えをインターネットで最初にヒットした「冬の兵士」[32]に求めた。

「冬の兵士」は、フリージャーナリスト田保寿一が日本に紹介したイラク帰還兵による反戦運動の一つ。2008年3月ワシントンＤＣ郊外で約50人の帰還兵が戦地で何をしたか、証言集会を行った。これに先立って、1971年、デトロイトで100人を越える帰還兵が戦場を語り、ベトナム戦争を止める先頭に立った。米マスコミはこの証言集会を無視したが、反戦運動のうねりを止めることはできなかった。ベトナム帰還兵の会は、その後も地道に反戦活動を続け、アフガニスタン・イラク戦争で傷ついた帰還兵を受けとめ、イラク帰還兵の会が立ち上がった。

このベトナム戦争時の「ウィンター・ソルジャー　ベトナム帰還兵の告白」(1971年) は、「ハーツアンドマインズ　ベトナム戦争の真実」(1974年) とともに今年になって初めて、日本でも公開され、ＤＶＤも発売された。イラク帰還兵の方は、田保寿一の映像作品「冬の兵士」、木村修の映像作品「立ち上がるイラク帰還兵（ＩＶＡＷ)」(2008年)、「アメリカ帰還兵・(ＩＶＡＷ) イラクに誓う」(2009年)、「立ち上がる（ＩＶＡＷ) 戦争を拒否する兵士たち」(2009年)、「ＩＶＡＷ反戦イラク帰還兵・日本で訴える」(2010年) [33]で見ることができる。ベトナム戦争とイラク戦争のウィンター・ソルジャーを見ると、帰還兵は同じ苦しみに苛まれている。言い方を変えると、若いイラク帰還兵は、ベトナム帰還兵の苦悩を知らないまま、戦場に行っている。住民を殺したことを思い出して涙を流し、住民に対してはもちろん、女性兵士や性的マイノリティの兵士に対する軍隊内の差別に心を痛め、戦場では交戦規定が守られないことに怒りを表明する。私の母は大阪で空襲に会

[32] 2008年、冬の兵士製作委員会
[33] マブイ・シネコープ製作

っているし、ヒロシマ、ナガサキで市民を大量殺戮したことを知る日本人としては「それが戦争だろう！」と言いたくなる。ベトナム反戦映画はアメリカだけで 50 作以上作られているにもかかわらず、今の若者は見ていないのだろうか？今年、第 82 回アカデミー賞を取った「ハートロッカー」（2008 年米）は、米兵が自爆テロをはかるテロリストからイラク住民を守るために命を賭けるというヒーロー物語である。真実が知らされず、教えられず、アメリカ社会が戦争中毒化し、その中に若者たちがいるとしたら、無知のまま戦場に立たされることになるのかもしれない。

戦場のリアリティーを知らない若者が、兵士になり、イラクやアフガニスタンで大殺戮を続けている。米兵はどう教育されるのだろうか？藤本幸久監督の「One Shot One Kill」は、この疑問にも答えてくれる作品だった。

サウスカロライナ州パリスアイランドにあるアメリカ海兵隊ブートキャンプ（新兵訓練所）ここに毎週 500 人から 700 人。高校を卒業した年齢の若者がやってくる。12 週間の訓練を受け、沖縄でより実践的な訓練を受け、イラクやアフガニスタンへ出兵する。

到着する若者は、教官から憲法ではなく、軍法下に置かれ、市民ではなくなることを告げられる。これからは上官の言うことに疑問を持たずに、即従え。“Yes,sir!” のみを絶叫することになる。12 週間の訓練期間中は、殴る・刺す・撃つ訓練が繰り返される。最後にはライフルで 500m近く前方の的に向かって 10 発中 8 発命中、素手やナイフも使って 30 種類の殺し方を無意識にできるようになる。これを「肉体の記憶」と言う。大統領の命令で戦争が始まると、後は戦場の上官の指示に肉体が反応するだけ。考える必要のない兵士ができあがる。映像は淡々と映し出す。巨大なベルトコンベアに乗せられて、車ができあがっていくように、兵士を大量生産する教育システムを見せていく。

この映画の中で特に印象的なのは、若い訓練兵が、トイレや食事に移動する数分の時間も、銃の取り扱い手順を叫ぶことを常に求められることである。一瞬たりとも私事を考える余地がない。外の世界とつながるために電話もかけられない。そのうちに、寝る寸前まで肉体を鍛える熱心な兵士になっていくところである。

これは、新兵訓練所の中だけで起こっていることだろうか？マスコミによって真実を伝えられない。将来の不安を煽られる。3 年生になると、髪も黒く染め、リクルートスーツを着て、ひたすら就職活動に邁進する学生たち。授業のある平日に就職セミナーを実施する看板をはばかることなく設置する大学。基地の外にも、自分の頭で考えない状況が生み出されているように思えてならない。私の一年生の共通教育の授業では、モンゴルのストリートチルドレンの映像を見せるのだが、感想を求めたら、「何も感じないという感想があってもいいじゃないか」と顔をこわばらせて言う学生がいた。理由を聞いてみると、「彼らは可哀想かもしれないが、自分は自分の人生のために闘うことで精一杯だ。彼らも努力すべきだ。」将来、公務員になりたい。そのためにWスクールも考えているという。官僚を目指しているのだろうか。子どもの頃に乗せられた高速道路。大学に入学した後は、自分で新しい高速道路の入り口を探さなければならない。一般道で人が歩いていようが、寝ていようが、関心をもってはいられないのだろうか。

「One Shot One Kill」は、「アメリカ　戦争する国の人々」という 8 時間 14 分の大作のシングルカットと言っていい。「アメリカ」では、どんな人が軍隊に入隊し、どんな訓練を受け、戦場でどんなことをし、帰還後、どんな暮しをしているか？ベトナム戦争の頃は

どうだったか？今のイラク戦争ではどうか？当事者、家族の語りを通して、戦争する国の人々を描いている。

この映画「アメリカ」でも、「冬の兵士」や「立ち上がるイラク帰還兵」、堤美果の『貧困大国アメリカ』でも、経済徴兵制をとっているアメリカで、志願する若者は、貧困ゆえに大学に行けず、大学に入学するチャンスをえるために、入隊することが明らかになっている。85%がそうであるという。つまり、自分の人生を切り開くために、入隊するのであって、戦場で敵を殺すという愛国心から入隊するのではないことが明らかになっている。このアメリカの若者と先に書いた学生の意識と、どこか違うところがあるだろうか？コインの裏表。豊かな家庭に生まれ、国立大学に入っても、さらなる競争原理に生き残るためWスクールまで考えて、それ以外のことを考える余裕がない。しかし、同じ授業の受講者には、「アメリカ」の映画を見て、3年生になると我先に就職活動に没頭する自分たちの姿を見出した鋭い意見もあった。

近年、自衛隊員が、セクハラやいじめを提訴したことが新聞でも見られるようになった。藤本幸久の片腕、影山あさ子プロデューサーは、提訴した女性自衛官を支援する代表を務めている。影山あさ子の考え方は、こうである。

北海道はもう農業では食っていけない。構造的な貧困が自衛隊員を生み出している。イラク戦争が始まった頃から、自衛隊員がホットラインに相談をすることが多くなった。自衛隊員の人権を守ることが、彼らを殺人者にしない。戦場から遠ざける。戦争をさせない。ということが、現実的な反戦平和運動なのである。

私は影山あさ子の問題意識で目が開いた。自衛隊には、憲法9条違反ということを言うばかりで、個々の自衛隊員について考えたことがなかったからである。辺野古で会う米兵たちの幼い顔に疑問を持った藤本幸久監督と、同じ視点が影山あさ子にもある。

10月の終わりに、辺野古でピース・ミュージック・フェスが開催され、私は学生とボランティアスタッフとして参加した。夜には、基地賛成派である米兵たちが来る社交街にも足を運んでほしいという主催者の気持ちを汲んで、夜遊びに出かけた。すると、バーには、遊び盛りの少年のような幼い顔の米兵たちがいた。握手をしたら手は暖かかった。「One Shot One Kill」を見てから半年あまり。私は、米兵に触れた。もし、藤本幸久に会わなかったら、私は沖縄に行っても、米兵の集まるバーに入らなかったし、米兵と話すこともしなかっただろう。「いつ戦地に行くのか、わからない。後数ヶ月は、ここにいるだろう。」と言って、ハロウィンを楽しむ米兵たちを見て、心は押しつぶされそうだった。彼らは来年には戦地に行く。元気な心と体のまま、再びハロウィンを迎えることができるのだろうか？人を殺した後、いったいどんな人になってしまうのか。「アメリカ」の映画の中では、アメリカのホームレス200万とも、300万とも言われているが、その3分の1以上が帰還兵だと言われている。怪我や病気、心の病に苦しんだり、アルコール中毒や麻薬中毒になる人も深刻だ。この幼い顔の若者たちに人殺しをさせたくない、と思った。彼らを軍隊に送り出す社会構造、そして兵士を戦地に送り出すことで利益をえる資本。憎むべきは、それであることを確信することができたのと、同じ状況が日本でも作り出されていることが「アメリカ」を鏡によく見てとれるようになった。